慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パスカルにおける宗教的基盤
Sub Title	La base religieuse chez Pascal
Author	加藤, 勝(Kato, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.217(76)- 233(60)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パスカルにおける宗教的基盤

加　藤　　勝

Ⅰ．パスカルの認識
Ⅱ．中庸の思想
Ⅲ．人間の理想像
Ⅳ．聖書とイエス・キリスト
Ⅴ．神と自然
Ⅵ．“自然は神の影像である”
Ⅶ．神とイエス・キリスト

*≪パスカルの宗教思想と数学思想≫においては，パスカルが神の認識に至るまでの過程について述べた。上記小論文の続編としてのこの小論文は“パスカルがキリスト教の神をどのようにとらえたか？”について，“神と自然との結びつき”を明らかにし，パスカルの宗教思想の根源を探求しながら考察するものである。

Ⅰ．パスカルの認識

(f.-382) “Quand tout se remue également, rien ne se remue en apparence, comme en un vaisseau. Quand tous vont vers le débordement, nul n'y semble aller. Celui qui s'arrête fait remarquer l'emportement des autres, comme un point fixe.”

パスカルはすべてのものが一様に動くときは一定点がなければその動きを知ることができないと述べる。即ち，ものごとを正しく判断するためには一定不変の規準を必要とするのである。このような事物の認識は一定不変の規準と比較するという点で相対的である。

---

*『芸文研究』№21

(f.-383) "Ceux qui sont dans le dérèglement disent à ceux qui sont dans l'ordre que ce sont eux qui s'éloignent de la nature, et ils la croient suivre : comme ceux qui sont dans un vaisseau croient que ceux qui sont au bord fuient. Le langage est pareil de tous côtés. Il faut avoir un point fixe pour en juger. Le port juge ceux qui sont dans un vaisseau ; mais où prendrons-nous un port dans la morale ?"

相反する立場にある人々がそれぞれの立場を主張し合うとき，その両者を正しく判断するためには規準となるべき他の一定点がなければならないという。両者がそれぞれ自分の立場から主張することは自分を判断の規準とした相対的認識によるものであるが，両者を正しく判断するということは両者をそれらとは別の一定不変の規準にてらして判断するというのであって絶対的認識であるということができる。パスカルはここで，港は船に乗っている人々を判断するための定点であるが，道徳における規準はどこにおくべきかを考える。

(f.-381) "Si on est trop jeune, on ne juge pas bien ; trop vieil, de même. Si on n'y songe pas assez, si on y songe trop, on s'entête, et on s'en coiffe. Si on considère son ouvrage incontinent après l'avoir fait, on en est encore tout prévenu; si trop longtemps après, on n'y entre plus. Ainsi les tableaux, vus de trop loin et de trop près; et il n'y a qu'un point indivisible qui soit le véritable lieu : les autres sont trop près, trop loin, trop haut ou trop bas. La perspective l'assigne dans l'art de la peinture. Mais dans la vérité et dans la morale, qui l'assignera?"

ここでパスカルは人は極端な状態にあるときはものごとを正しく判断しないと述べているが，これは≪パスカルの宗教思想と数学思想. II≫で指摘した"極端な行為は何ごとも理解し，認識するものではない"ということと同じである。パスカルは絵画を見るための適当な位置を"真の場所"といい，真の場所たる不可分な点は"一つ"しかないと述べている。この

ことからパスカルは認識における判断の規準はただ一つであるとしていたのであり，従つて，パスカルは判断の規準を絶対的なものに求めたということができる。ここでもパスカルは絵画においては遠近法が真の場所を決定するが，真理や道徳においてはだれがそれを決定するだろうか？と述べて，真理や道徳の規準について考えるのである。

以上の三つの断片から，パスカルの認識は絶対的規準による相対的認識即ち絶対的認識であるということができよう。

II. 中庸の思想

パスカルは（f.-383）で道徳における規準をどこに求めるべきかを，また，（f.-381）で真理や道徳の規準はだれが決定するのかを考えている。まづ，パスカルは道徳について次のように述べている。

（f.-357）"Quand on veut poursuivre les vertus jusqu'aux extrêmes de part et d'autre, il se présente des vices qui s'y insinuent insensiblement, dans leurs routes insensibles, du côté du petit infini ; et il s'en présente, des vices, en foule du côté du grand infini, de sorte qu'on se perd dans les vices, et on ne voit plus les vertus. On se prend à la perfection même."

徳を極端のところまで追求しようとすると悪徳が気づかぬまに無限小の側から徳のなかにしのび込み，また，無限大の側から悪徳が群をなしてあらわれるという。前者は徳を高めようと考えることはそれと意識せずに悪徳を行うことであり，徳を高めようと考えること自体が悪徳であるということを意味し，人間の内面の悪徳を指す。また，後者は徳を高めるためになされる多くのことは自分では気づかぬが悪徳であり，徳を高めるために悪徳を行っているということを意味し，人間の外面の悪徳を指す。ここで無限小，無限大という言葉は人間の内面と外面，小なる悪徳と大なる悪徳をそれぞれ同時に表わすために用いた比喩的表現であろう。極端に高められた徳は完全なるものであるが，以上考察したことから徳を高めようとすることによって逆に徳が失われるのであるから，人は求めようとした完全

性につまづくのである。従って，パスカルは徳を一方の極端に高めることはできないと考えるのである。

(f.-359) "Nous ne nous soutenons pas dans la vertu par notre propre force, mais par le contrepoids de deux vices opposés, comme nous demeurons debout entre deux vents contraires : ôtez un de ces vices, nous tombons dans l'autre."

徳は対立する二つの悪徳の均衡によるもので，一方の悪徳をとり除き均衡が破れると徳は悪徳になるという。対立する二つの悪徳の均衡を保つことは両者の中間に身をおくことにほかならない。ここで，"対立する二つの悪徳"というのは，例えば，"正と邪""善と悪"というような二つのものを意味するのであるが，そのうちの邪あるいは悪をとり除いて正あるいは善に身をおく場合でも (f.-357) でパスカルが述べていることからそれは最早，徳ではなくなるので，両者とも悪徳というのであろう。

徳についての以上のような考えにもとづいて，パスカルは人間の在り方について次のように述べている。

(f.-378) "*Pyrrhonisme.*——L'extrême esprit est accusé de folie comme l'extrême défaut. Rien que la médiocrité n'est bon. C'est la pluralité qui a établi cela, et qui mord quiconque s'en échappe par quelque bout que ce soit. Je ne m'y obstinerai pas, je consens bien qu'on m'y mette, et me refuse d'être au bas bout, non pas parce qu'il est bas, mais parce qu'il est bout ; car je refuserais de même qu'on me mît au haut. C'est sortir de l'humanité que de sortir du milieu.

La grandeur de l'âme humaine consiste à savoir s'y tenir ; tant s'en faut que la grandeur soit à en sortir, qu'elle est à n'en point sortir."

パスカルは"極端な精神は精神の極端な欠如と同様に狂気として非難される。中庸以外によいものはない"と述べ，また，"私は下の端（上の端）にいることを拒む。それはそこが下（上）であるからではなくて端で

あるからである”と述べて，極端な状態にあることを拒む。このことは（f.-357）の極端は悪であるというパスカルの考えからすれば当然のことである。そして，中間から逸脱せず，中間に身を持することが人間性にかなうことであり，人間の魂の偉大さであるという。特に，“偉大さは中間から逸脱することにあるどころか，そこから逸脱しないことにある”と述べて，極端に向うことをいましめている。

以上の考察から，この断片は（f.-357），（f.-359）から導かれる帰結を一般的に論じたものであるということができる。なぜなら，中間から逸脱することは極端に向うこと〔(f.-357)〕であり，そこから逸脱しないことは中間に身を持すること〔(f.-359)〕であるから。ここにおいて，(f.-383)，(f.-381) でのパスカルの“道徳における規準の問題”が解決される。そして，その解答は“中庸”ということである。

パスカルの中庸という思想は道徳についてだけでなく，宗教，理性，その他についてもみることができる。即ち，

(f.-254) “Ce n'est pas une chose rare qu'il faille reprendre le monde de trop de docilité. C'est un vice naturel comme l'incrédulité et aussi pernicieux : superstition.”

極端な従順は信仰を迷信にまでおしやってしまい，これは不信仰と同様に悪徳であるというのである。(f.-357) の考えと全く同じである。また，

(f.-253) “Deux excès: exclure la raison, n'admettre que la raison.”

(f.-379) “Il n'est pas bon d'être trop libre. Il n'est pas bon d'avoir toutes les nécessités.”

パスカルは理性についても，自由についても極端なるものは悪であるというのである。

このようなパスカルの考えは (f.-381) の“人は極端な状態にあるときはものごとを正しく判断しない”という考えや，≪パスカルの宗教思想と数学思想Ⅱ≫にみられる“極端な行為は何ごとも理解し，認識するものではない”という考えに通ずるものであり，*(f.-70) の“……自然はわれわれ

をちようど中間においたので，われわれが秤の一方を変えると他方をも変えることになる。……" と述べているものと同じである。このようにパスカルの中庸という思想は，パンセのあちこちにあらわれており，殆んどあらゆる思考対象について貫かれているのである。

Ⅲ. 人間の理想像

以上述べたごとく，パスカルは人間の在り方は中間に身を持すべきであり，人間の偉大さは中庸にあるという。しかし，さらに，パスカルは人間の偉大さについて次のように述べている。

(f.-353) "Je n'admire point l'excès d'une vertu, comme de la valeur, si je ne vois en même temps l'excès de la vertu opposée, comme en Épaminondas, qui avait l'extrême valeur et l'extrême bénignité. Car, autrement, ce n'est pas monter, c'est tomber. On ne montre pas sa grandeur pour être à une extrémité, mais bien en touchant les deux à la fois, et remplissant tout l'entre-deux. Mais peut-être que ce n'est qu'un soudain mouvement de l'âme de l'un à l'autre de ces extrêmes, et qu'elle n'est jamais en effet qu'en un point, comme le tison de feu. Soit, mais au moins cela marque l'agilité de l'âme, si cela n'en marque l'étendue."

"人は一つの極端にあるからといってその偉大さを示すものではなく" という部分は (f.-378) で述べているパスカルの主張と同じものであるが，ここで，パスカルは "同時に二つの極端に達し，その中間をすべて満たすこと" を人間の偉大さを示すものとしてつけ加えている。人は一つの極端に達し得ても，同時に二つの極端に達することはできないだろうし，まして，その中間をすべて満たすことは殆んど不可能なことといえる。パスカル自身，この点を認めており，"それは一方の極端から他方の極端への魂

---

*≪パスカルの宗教思想と数学思想Ⅱ≫

の急激な運動にしかすぎないかもしれない。魂は松明の火のように実は一点にあるだけにすぎないかもしれない"。と補足している。それにも拘わらず，"そのことは魂の広がりを示さないまでも，少なくとも魂の敏捷さを示すものである"と述べて，二つの極端の中間を満たすことの不可能なることを認めるのであるが，二つの極端に達することは可能であると考えるのである。すなわち，パスカルは人間の偉大さは，魂の敏捷さにあるという。ともあれ，パスカルは，人間の偉大さについて，"同時に二つの極端に達し，その中間をすべて満たすこと"を要求する。これは現実の人間によって満たされ得ない要求であるから，ここでパスカルが論ずるところの人間は超人間的存在である。この超人間的存在こそ，パスカルがえがく人間の理想像であるということができるのである。

ところで，パスカルも"同時に二つの極端に達する"ことができるのは人間ではなくて，超人間的存在であると考えていたことが，次の断片からうかがえる。即ち，パスカルは

(f.-145) "〔Une seule pensée nous occupe, nous ne pouvons penser à deux choses à la fois : dont bien nous prend, selon le monde,non selon Dieu.〕"

と述べる。人間は"同時に二つのことを考えることはできない"ということと，"同時に二つの極端に達することができない"ということとは極めて類似した表現である。そして，"このこと"は"人間の側からはよいことであるが，神の側からはそうではないという。すなわち，パスカルは，人間は"同時に二つのことを考えることはできないが，神はそうすることができる"と考えるのである。

(f.-353) とこの断片は同じ主題について述べたものではないから，そこに類似性が認められるからといって (f.-353) でパスカルがえがいた人間の理想像は神であるといい切るのは適当ではない。しかし，パスカルのえがく人間の理想像は，まさに超人間的存在であるから，パスカルは神を目指していたと考えられる。

Ⅳ. 聖書とイエス・キリスト

(f.-684) "*Contradiction.*——On ne peut faire une bonne physionomie qu'en accordant toutes nos contrariétés, et il ne suffit pas de suivre une suite de qualités accordantes sans accorder les contraires. Pour entendre le sens d'un auteur, il faut accorder tous les passages contraires. Ainsi, pour entendre l'Écriture, il faut avoir un sens dans lequel tous les passages contraires s'accordent. Il ne suffit pas d'en avoir un qui convienne à plusieurs passages accordants, mais d'en avoir un qui accorde les passages même contraires. Tout auteur a un sens auquel tous les passages contraires s'accordent, ou il n'a point de sens du tout. On ne peut pas dire cela de l'Écriture et des prophètes; ils avaient assurément trop bon sens. Il faut donc en chercher un qui accorde toutes les contrariétés. Le véritable sens n'est donc pas celui des Juifs; mais en Jésus-Christ toutes les contradictions sont accordées. Les Juifs ne sauraient accorder la cessation de la royauté et principauté, prédite par Osée, avec la prophétie de Jacob……"

この断片は，聖書とイエス・キリストに対するパスカルの考えを述べたものである。パスカルは，まづ，"われわれのすべての対立するものを一致させない限り，りっぱな人間像をつくることはできない" といい切る。次いで，著者と著書との関係について "一人の著者の意味するところを理解するためにはすべての相反する章句を一致させなければならない" と述べ，さらに，"それゆえ，聖書を理解するためにはすべての相反する章句がそこで一致するような一つの意味をとらえなければならない" と述べる。こうしたパスカルの主張は "聖書や予言者は確かに極めて立派な意味をもっているがゆえに，すべての対立するものを一致させる一つの意味をそこに求めなければならない" という宗教的感情に向っていく。そして，

"真の意味（一つの意味）はユダヤ教徒の解した意味ではなく，イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる"と考える。すなわち，パスカルは，聖書や予言者の意味するものはイエス・キリストであり，イエス・キリストこそ聖書のすべての相反する章句を一致させるものであると考えるのである。こうした考えは，この断片における論理の必然的な帰結ではなく，そこに宗教的思想を伴なった飛躍はあるが，この論理を逆にたどれば，はじめに述べている"りっぱな人間像"はイエス・キリストを指しているということができる。

(f.-353) で述べたごとく，"同時に二つの極端に達すること"は，現実の人間にとっては不可能なことであり，また，(f.-684) で述べている"すべての対立するものを一致させること"も現実の人間にとっては不可能なことであるから，これらを可能ならしめるものとして，パスカルは，超人間的存在を信じていた。(f.-353) でパスカルがえがく人間の理想像，すなわち"同時に二つの極端に達し，その中間をすべて満たすもの"と，(f.-684)で述べるりっぱな人間像，すなわち，"われわれのすべての対立するものを一致させ得るもの"とは，その内容からみて同一の発想にもとづく同一の存在であると考えることができる。

ここで明らかにすべき問題点は，

1) なぜ，両者は同一の存在であるといえるか？

2) 超人間的存在とはなにか？ ((f.-684) ではイエス・キリストであるというのだが)

3) 超人間的存在というイメージの発想はなににによるものか？

ということである。

次に，これらの問題点の解明を試みる。

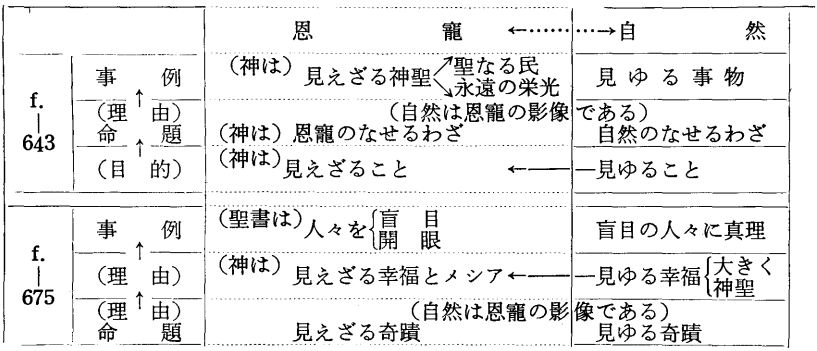
V. 神 と 自 然

(f.-643) "……Dieu, voulant faire paraître qu'il pouvait former un peuple saint d'une sainteté invisible et le remplir d'une gloire éternelle, a fait des choses visibles. Comme la nature est une

image de la grâce, il a fait dans les biens de la nature ce qu'il devait faire dans ceux de la grâce, afin qu'on jugeât qu'il pouvait faire l'invisible, puisqu'il faisait bien le visible.……"

(f.-675) "……Et cependant, ce Testament, fait pour aveugler les uns et éclairer les autres, marquait, en ceux mêmes qu'il aveuglait, la vérité qui devait être connue des autres. Car les biens visibles qu'ils recevaient de Dieu étaient si grands et si divins, qu'il paraissait bien qu'il était puissant de leur donner les invisible, et un Messie. Car la nature est une image de la grâce, et les miracles visibles sont images des invisibles.……"

以上二つの断片は聖書について述べたものである。これらの内容を分析し，比較してみると文章表現に相違はあるけれど，述べられている主題，内容は全く同一であるということができる(次の図)。この二つの断片には"自然は恩寵の影像である"という宗教上の命題が共通に現われており，前者においては，事例の直接的な理由として，また，後者においては，その間接的な理由として述べられている。すなわち，各断片は，"自然は恩寵の影像である"という命題を前提として述べられており，この命題がひき出されるべき論理的根拠は見当らない。パスカルにとっては，この命題は既知，既存のものである。では，この命題はどこからひき出されたのであろうか？



この問題を考える前に，“自然は恩寵の影像である”という命題と殆んど同じ表現をもつ命題“自然は神の影像である”が(f.-580)に見られるので，両者の関連を考察することにする。

(f.-119) “La nature s'imite : une graine, jetée en bonne terre, produit ; un principe, jeté dans un bon esprit, produit ; les nombres imitent l'espace, qui sont de nature si différente. Tout est fait et conduit par un même maître : la racine, les branches, les fruits ; les principes, les conséquences.”

パスカルは，よい土地に播かれた種子とよい精神に播かれた原理とが類似していることや，数と空間とが類似していることを自然のなかに見出して，自然はたがいに模倣するという。そのことは根，枝，果実，原理，結果というように，多種多様なものすべてが，即ち自然が同一の主によって創造されるからであると考える。

また，パスカルは次のように述べる。

(f.-120) “Nature diversifie et imite, artifice imite et diversifie.”

これは自然と人工との相異をたくみに表現したものである。

自然は多様であるがすべてが同一の主によって創造されるがゆえに類似するのであるから，自然のなかに見出される類似性こそ神の象徴であるということができる。パスカルはそのように考えていたと思われる。なぜなら，以上二つの断片に見られるパスカルの考えを総合し，抽象したともいい得るような次の断片から，そのことをうかがい知ることができるから。

(f.-580) “La nature a des perfections pour montrer qu'elle est l'image de Dieu, et des défauts pour montrer qu'elle n'en est que l'image.”

自然のなかの多種多様なものの間に認められるのは類似性であって，単一（同一）ということではない。この意味において自然は若干の完全さをもつにすぎない。また，自然は同一の主によって創造され，従つて，自然は類似性をもち，そこに神の象徴を見出すがゆえに，“自然は神の影像で

ある''というのである。故に，''自然が若干の完全さをもっているのは，自然が神の影像であることを示す''ことになるのである。もし自然が神と同一であるとすれば自然は完全さをもつことになるが，自然は同一の主によって創造され，多種多様であって，そこには似類性しか存在しないのであるから，自然は完全さをもたない。故に，''自然が若干の欠陥をもっているのは自然が神の影像でしかないことを示す''のである。ここで，パスカルが，神は完全なものであることを前提として論じていることは明らかである。多なる自然は一なる神によって創造され，一なる神は多なる自然を創造する。即ち，多は一に集約され，一は多に投影される。ここに，神と自然との間の一対多という対応の概念を見ることができる。

以上述べたごとく，パスカルは，神と自然との関係を''自然は神の影像である''という言葉で表現するのであるが，このことを聖書や宗教の理解について具体的にあてはめ説明したのが(f.-643)および(f.-675)である。即ち，自然は神によって創造される〔''自然は神の影像である''〕のであるが，神は''何をもって''自然を創造したかを具体的に示したのがこの二つの断片である。そこでは，神は恩寵をもって自然を創造した〔''自然は恩寵の影像である''〕というように述べられているのである。この場合，恩寵と自然との間には一対一の対応が存在することは明らかである。

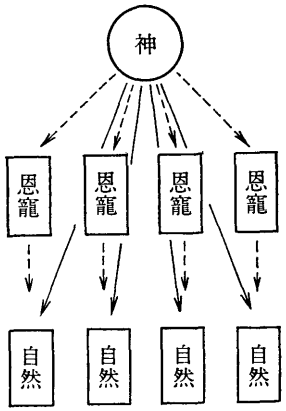
以上の考察から''自然は神の影像である''というのは神と自然との関係の抽象的表現であり，''自然は恩寵の影像である''というのはそれの具体的表現であるということができる。

''自然が若干の完全さと若干の欠陥をもっている''ということは''自然は神の影像である''ということの説明ではなく，前者と後者とは同等の命題であって，互に他の言葉での云い換えにしかすぎない。従って，この段階においては，''自然は恩寵の影像である''という命題はどこからひき出されたのであろうか？　というさきに提起した疑問はいまだ解決されないのみか，''自然は神の影像である''という命題についても同様の疑問が生じてくる。''自然が若干の完全さと若干の欠陥をもつとはどういうことか？''''自然は神（恩寵）の影像であるとはどういうことか？''というこ

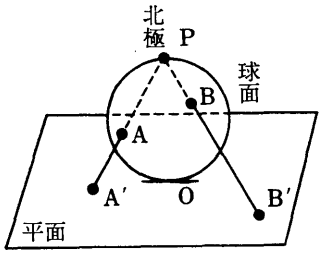
とこそ，この問題の本質であって，このことが解明されるならば，この命題がひき出さるべき背景もおのづから知られるであろう。

VI. “自然は神の影像である”

“自然は神（恩寵）の影像である”という命題は，さきに述べたように“すべては同一の主によって創造され導かれる”ということを象徴的に表わしたものである。従つて，この命題は宗教的な発想にもとづくものであるといってしまえばそれまでであるが，それでは，なぜ，パスカルは“影像 image”という言葉を用いたか。影像という言葉は宗教的な発想にもとづくものであると片づけてしまうことは，必ずしも納得できるものではないように思われる。この点について，考察してみたい。

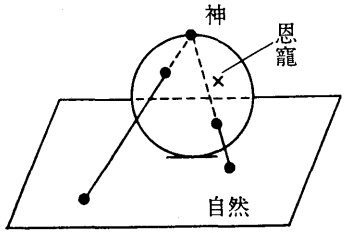


影像とは対応の概念にもとづくものである。“自然は神の影像である”，“自然は恩寵の影像である”という二つの命題は既に考察したように，神と自然との間の対応の概念の上に成り立つ。左図はこれら二つの命題を対応という観点でとらえ，図解したものである。この図解にもとづいて，“自然は神の影像である”，“自然は恩寵の影像である”という二つの命題の意味するものを一つのモデルによってあらわしてみよう。



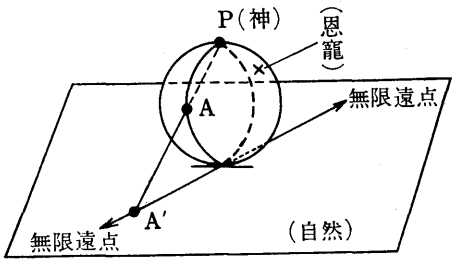
球が平面と一点Oで接しているとする。北極Pと球面上の一点Aとを結ぶ直線が平面と交わる点をA′とするとき，A′をAの影像という。このような射影の方法によれば球面上の点と平面上の点との間に一対一の対応が存在し，球面上のすべての点は平面上に射影される。これを極射影といい，このモデルをリーマン球という。

北極Pに限りなく近い球面上の点の平面上への影像は平面上の限りなく遠い点（無限遠点）となる。逆に，平面上の限りなく遠い点（無限遠点）は北極Pに対応する。このことから北極Pを無限遠点という。従つて，平面上のすべての無限遠点は球面上の一点，北極Pであるということができる。



自然は神(恩寵)の影像である。

古代より完全性を象徴するものとして，平面図形では円が，空間図形では球が用いられてきた。パスカルは神は完全なるものであると考えていた（f.-580)ので，いま，神を球の北極Pで，神の恩寵を球面で，自然を平面であらわすことにすれば，極射影は“自然は神の影像である”，“自然は恩寵の影像である”という命題のモデルができ上る。（上図）



北極Pを通る大円（球の中心を通る平面で球を切ったときの切口の円）を平面上へ極射影すれば，平面上の直線となる。直線上の両極端（無限遠点）はともに北極に対応するから，両極端は北極Pにおいて一致し，直線上のすべての点は球面上の大円に対応する。このことは（f.-353）の“同時に二つの極端に達し，その中間をすべて満すこと”を示すと考えられる。従つて，同時に二つの極端に達し得るものは神であり，神は（その中間）のすべての恩寵をもつのである。また，平面上の点Oを通るすべての直線の無限遠点は北極Pに対応し，北極Pにおいて一致することは容易に理解される。このことは(f.-684)の“われわれのすべての対立するものを一致させない限り，りっぱな人間像をつくることはできない”という場合の“すべての対立するものを一致させること”を示すと

考えられる。従つて，すべての対立するものを一致させ得るものは神であり，りっぱな人間像とは神を指すということになる。

もし，パスカルが“自然は神の影像である”，“自然は恩寵の影像である”という命題を述べるにあたって，このようなモデルを心にえがいていたとすれば（あくまでも，仮定のことであるが）“Ⅳ．聖書とイエス・キリスト”のところで述べた三つの問題点は解決されることになるであろう。即ち，

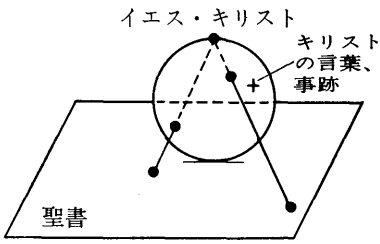
1) “同時に二つの極端に達し，その中間をすべて満たし得るもの”と“われわれのすべての対立するものを一致させ得るもの”とはともに北極Pによって象徴されるがゆえに，両者は同一の存在であり，
2) 従つて，超人間的存在とは神であり，
3) 超人間的存在というイメージの発想は前述のモデル（リーマン球）にもとづくものである。

Ⅶ．神とイエス・キリスト

(f.-684) において，パスカルは“聖書を理解するためにはすべての相反する章句がそこで一致するような一つの意味をとらえなければならない”と述べている。この文章の主張に関する限り，すべての相反する章句を一致させ得るなにものかがみつけられるならば，それがキリストでもメシアでもよいのである。しかし，パスカルは“聖書や予言者は確かに極めて立派な意味をもっている。それゆえ，すべての対立するものを一致させる一つの意味をそこに求めなければならない。従つて，真の意味はユダヤ教徒の解した意味ではない。イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる”と述べて，イエス・キリストをえらんだのである。ここには，メシアをおいてイエス・キリストをえらぶべき論理的必然性は見られない。パスカルがイエス・キリストをえらぶのは全く宗教的（キリスト教的）立場によるにすぎない。

しかし，“イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる”という言葉を (f.-684) 全体の論理構成からみれば，それは単に宗教

的思想のみによるというよりは，“すべての矛盾を一致させる”ためにこそイエス・キリストをえらんだと解すべきである。従つて，“イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる”という言葉は“自然は神の影像である”という命題につながるものであり，この命題を聖書の理解に適用したのが(f.-684)であると考えられる。ゆえに，“イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる”ということは“聖書はイエス・キリストの影像である”ということを意味することになる。即ち，パスカルにおいては，イエス・キリストと聖書との関係は，神と自然との関係と同じである。（下図）



このことから，パスカルは神とイエス・キリストとは同一であると考えていたことになる。また，一方，(f.-684)の考察から，パスカルの“りっぱな人間像”〔超人間的存在〕とはイエス・キリストであり，Ⅵ.の考察から，その超人間的存在とは神であるから，神はイエス・キリストであることになる。いづれにせよ，パスカルにおいては，神とイエス・キリストとは一致しているということができる。

以上考察したごとく，“イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる”という命題は，“自然は神の影像である”という命題と独立無関係ではない。あえていえば，前者は後者から導かれる。Ⅴ.で提起された疑問“自然は神の影像であるとはどういうことか？”は，これまでに述べたところから解決されるであろう。それにしても，この命題は確かに宗教的色彩が濃いといわざるを得ない。しかしながら，一方，既に述べたごとく，パスカルが神と自然との間に対応を認めるがゆえに，“影像”という言葉を用いたこの命題が生れたということも確かである。パスカルの宗教的な思想や言辞のことごとくが宗教的なものにもとづくというより

は，宗教的なもの以外のものにも帰因するということができるだろう。

“自然は神(恩寵)の影像である”という命題を具体的に説明し，すでに提示したいくつかの問題点を理性的に矛盾なく論理的に解決し得るものはリーマン球で示されるモデル以外にはないように思われる。もし，この推察が大きくはずれることがないならば，パスカルの宗教的な思想は数学的発想がその主要な部分を占めているように思われるのである。

ところで，リーマン球はリーマン (Bernhard Riemann, 1826～1866) が考えだしたもので，パスカルの時代より200年ものちのものである。従つて，パスカルが神や宗教，神と自然の関係などについて考えるとき，リーマン球を頭にえがいていたというようなことはあり得ない。この小論文はパスカルが神やイエス・キリストおよびその他について述べたいくつかの断片や，それらに見られるパスカルの思想が，リーマン球というモデルによって明確に説明され，一応の解決を見ることができるということを示したにすぎない。パスカルが完全な形でリーマン球を考えていたとは思わないが，少くとも，別の形での，または，なんらかの形でのリーマン球のようなモデルをえがいていたことは確かのように思われる。無限や神についてのパスカルの考え方（≪パスカルの宗教思想と数学思想≫）や，この小論文にのせた断片に見られるパスカルの思想などからそのようにいうことができる。パスカルが神を無限なるものと規定し，神に無限を対応させていたこと，パスカルが無限遠点という考えをはじめて幾何学に導入したデザルグと親交があったこと，また，パスカル自身，射影幾何学の研究者であったことなどを考え合わせると，パスカルの神と自然との関係のとらえ方とリーマン球のモデルとの一致は単なる偶然ではないように思われる。興味深いことである。

※各断片につけた番号は Pensées : Brunschvicg 版による。